旭物産

カット野菜の新工場

17年春稼働 生産規模倍増へ

カット野菜製造の旭物産（水戸市平須町、林正二社長）は、創業地の旧内原工場跡地（同市高田町）に新工場を建設し、生産規模を倍増させる。近年急増するカット野菜の需要に対応するのが目的で、新工場の年間売り上げは現在の本社水戸工場の2倍の100億円を見込む。今月着工し、完成は2016年末、操業開始は17年春ごろを予定。稼働と併せて本社も同敷地内に移転する。

現在、カット野菜を製造する旭物産の本社水戸工場＝水戸市平須町

新工場では、サラダなど生食用のカット野菜を製造し、現在1日当たり20万パックの生産能力を倍増させる計画。最新設備を導入するとともに、食品安全の国際規格FSSC22000の認証取得を目指す。従業員は30～40人を新規採用し、計360人程度の態勢とする。

建設場所の旧内原工場は、東日本大震災後に建屋を取り壊し、さら地となっていた。周囲の土地も買い足して約6万3千平方㍍の敷地を確保し、うち工場の建築面積は約1万1千平方㍍。投資額は計37億円を見込む。

現在、カット野菜を製造する本社水戸工場は03年の開設後、増築を繰り返し、手狭となっていた。工場3棟は新工場稼働後に一度取り壊すなどして、老朽化が進む鉾田工場（鉾田市）とともに、今後の活用を検討する。

同社は1971年に創業し、78年にカット野菜製造に参入。生食用では全国3位の生産規模で、スーパーやコンビニ向けに袋詰め商品などを供給する。ほかに小美玉工場（小美玉市）ではモヤシ、鉾田工場ではダイコンのツマを生産する。

カット野菜は、すぐに食べられて無駄が少ないとして高年齢層を中心にここ数年で需要が急増。それに伴い、同社の売上高も右肩上がりで、2014年9月期には前年同期比約15億円増の94億5千万円となり、今期は100億円を超えるペース。

新工場について、林社長は「当社独自の技術やノウハウを生かしながら、生産増加を図り、カット野菜の需要増に対応していく」としている。（松下倫）